22 10 14

20 40

5 6 2 2

■

(p.1)

■

1 , , ,

(p.2-3)

■

5 (p.4)

■

p.5

■

(p.6)

■

(p.7)

National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構
151-0052 3 1
http:// www.niye.go.jp TEL.03-6407-7742

■

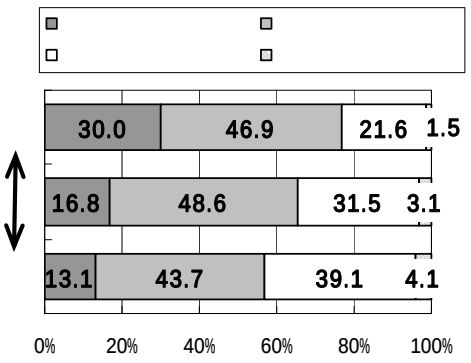
(p.8)

■ 1
(p.9-10)

■
(p.11)

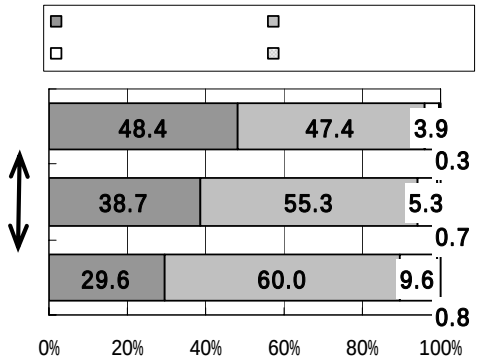
■ 2
(p.12)

（現在）



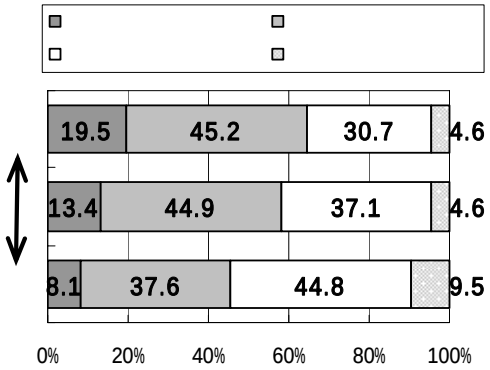
3-3- -21

電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う（現在）



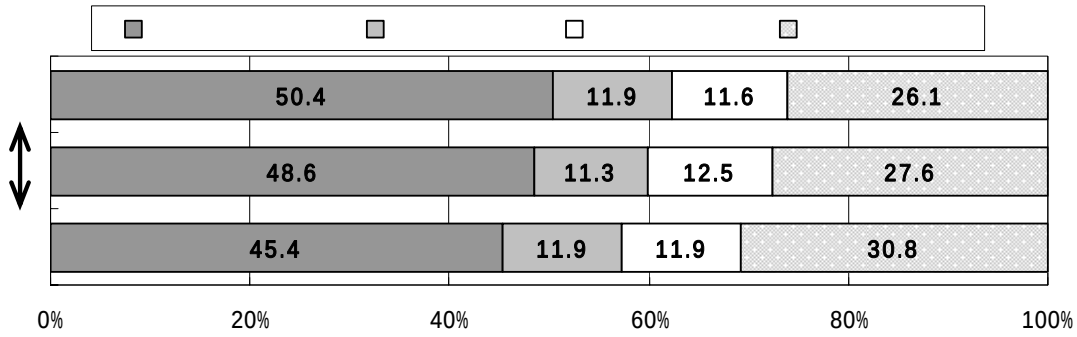
3-3- -18

友だちに相談されることがよくある（現在）

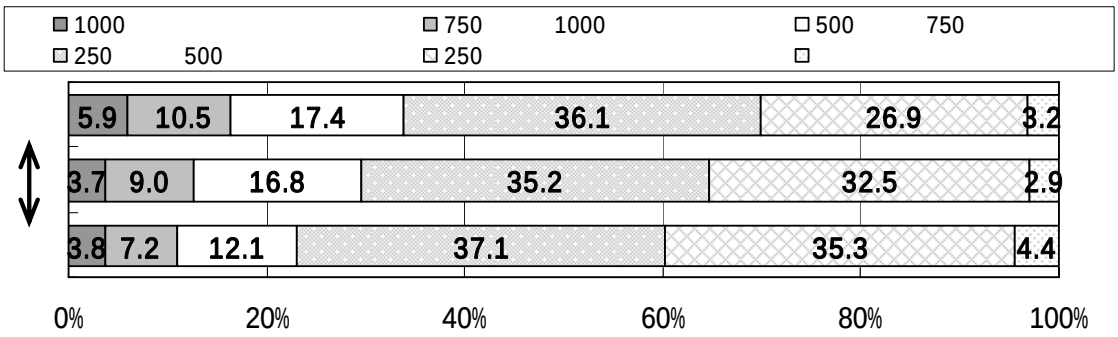


3-3- -2

1

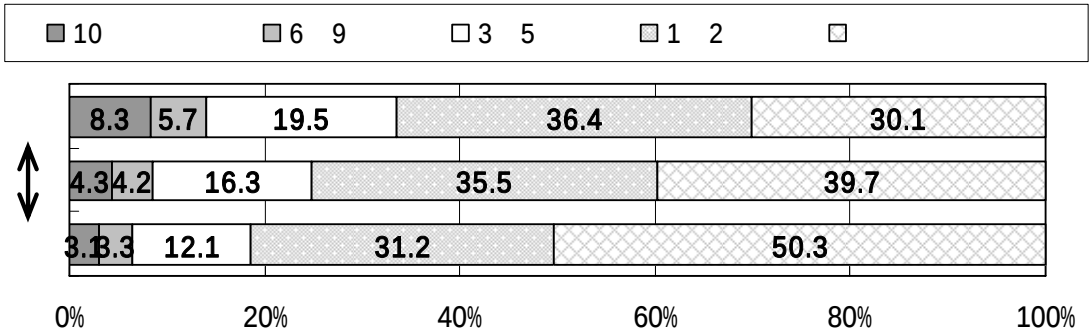


3-5-1



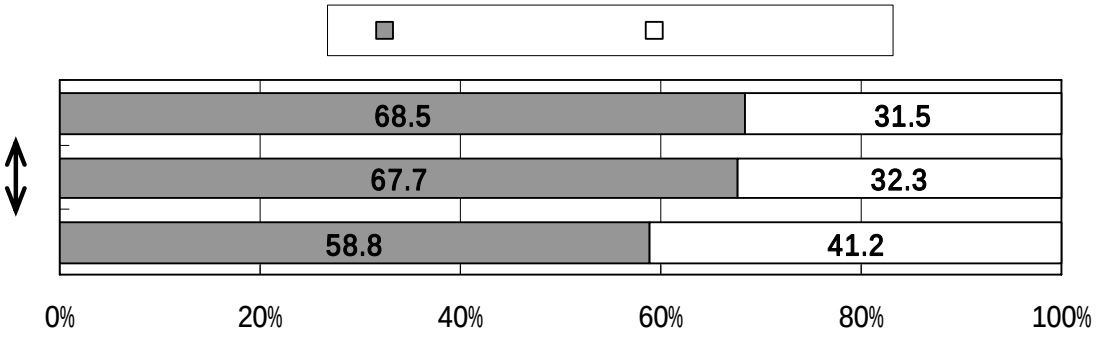
3,527

3-5-2

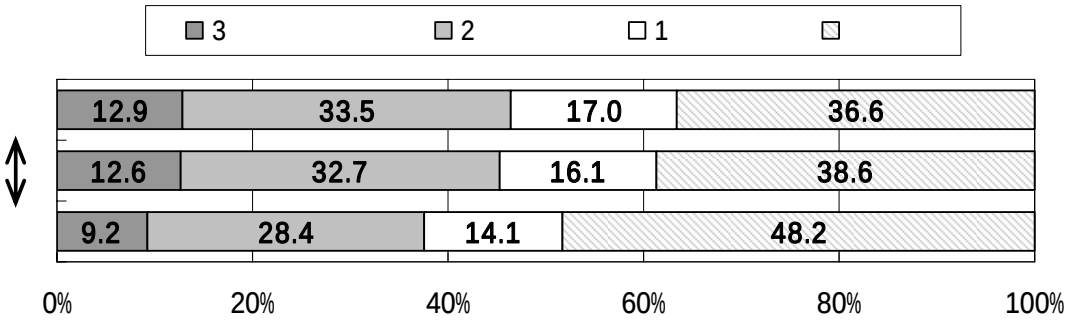


3-5-6 1

2

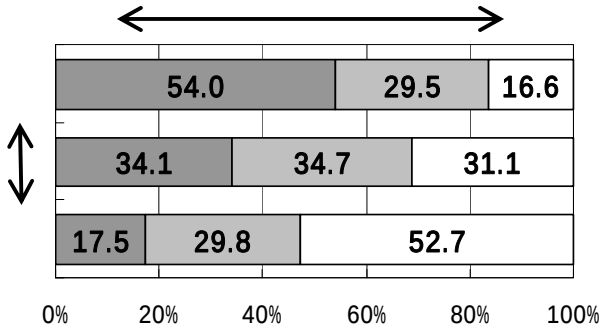

68.5
31.5
67.7
32.3
58.8
41.2
0%
20%
40%
60%
80%
100%

3-5-4


3
2
1
12.9
33.5
17.0
36.6
12.6
32.7
16.1
38.6
9.2
28.4
14.1
48.2
0%
20%
40%
60%
80%
100%

3-5-5

5 6



3-6-1

3-6-1.

	.247**	.218**	.252**	.269**	.265**	.185**
	.292**	.321**	.320**	.324**	.316**	.288**
	.274**	.273**	.299**	.315**	.299**	.296**
	.175**	.166**	.243**	.190**	.254**	.208**
	.285**	.271**	.333**	.366**	.321**	.304**
	.185**	.187**	.232**	.229**	.232**	.215**
	.304**	.314**	.332**	.346**	.377**	.329**

**p<.01

0.3

3-6-2.

	4	0	8	8	2	3
	4	6	5	2	4	4
	1	1	6	6	9	3
	0	1	8	2	6	8
	1	0	7	9	6	2
	0	0	7	4	9	5
	2	2	3	6	8	4

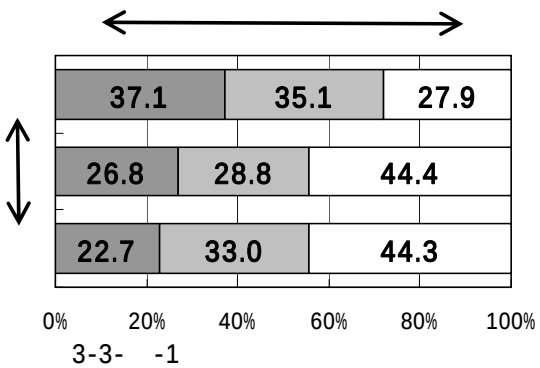
5

6

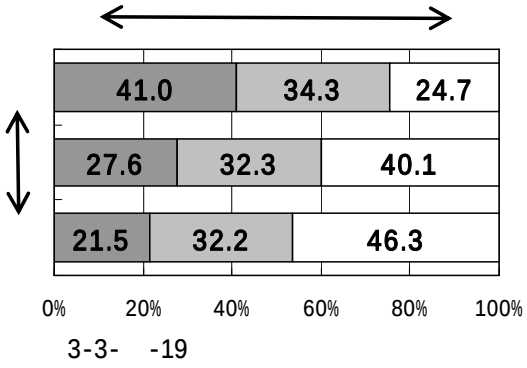
2

(p.12)

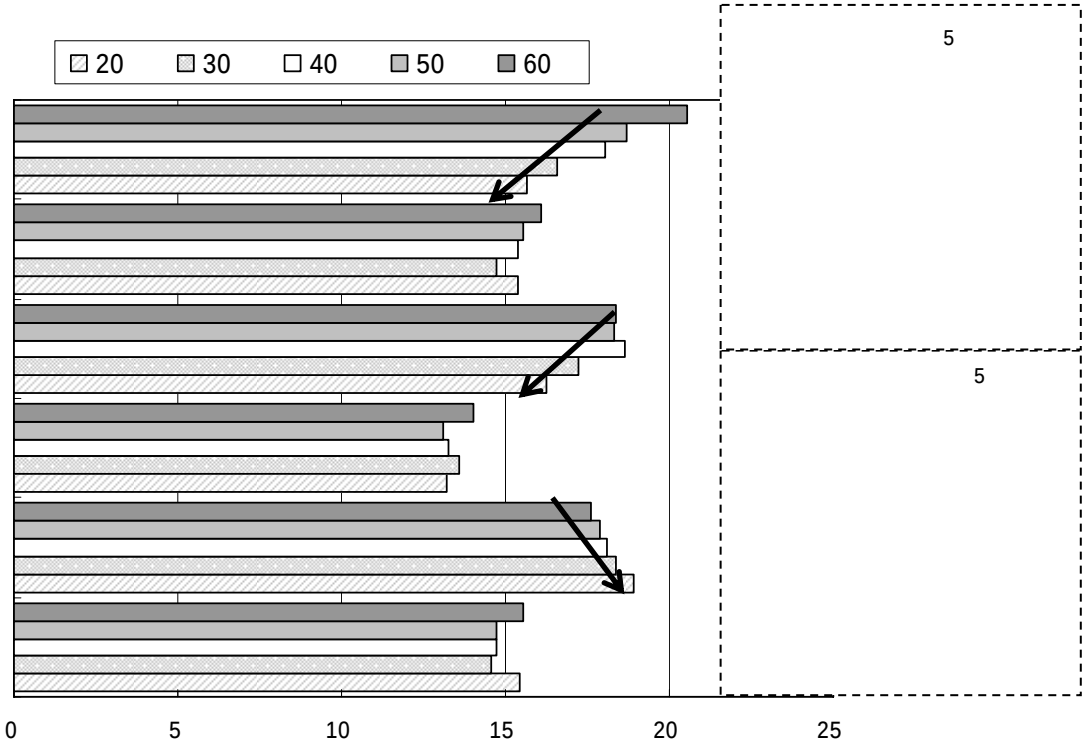
3-3-



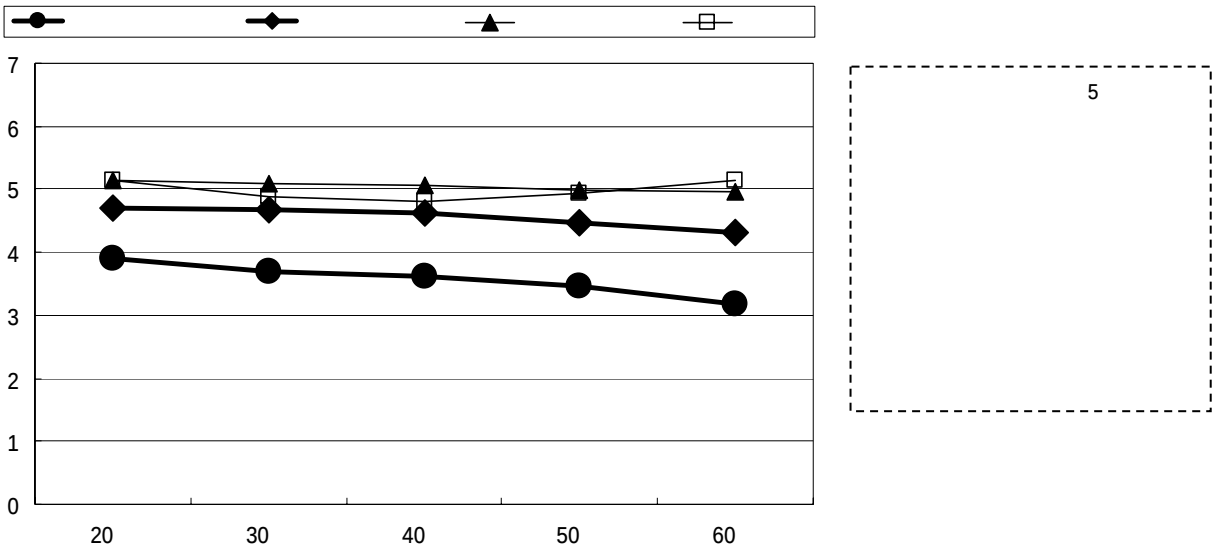
3-3- -1



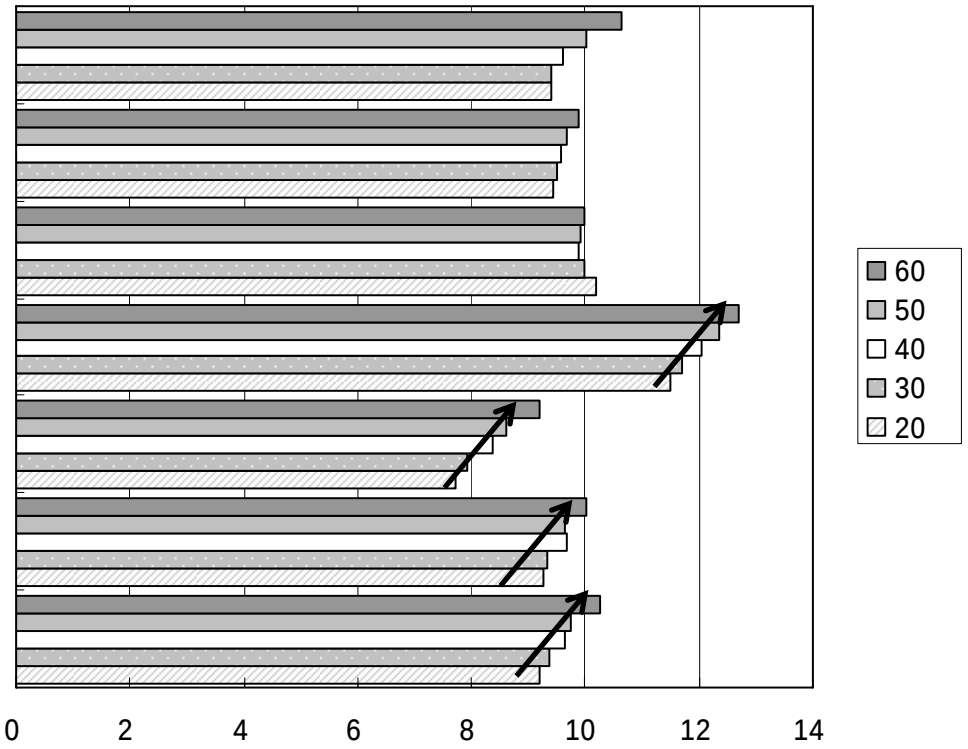
3-3- -19



3-1 0-40



3-1- 0-10

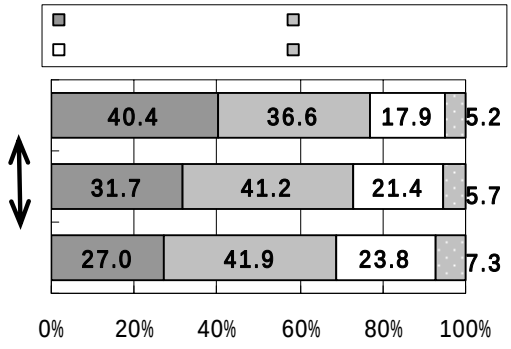


3-2

0-15

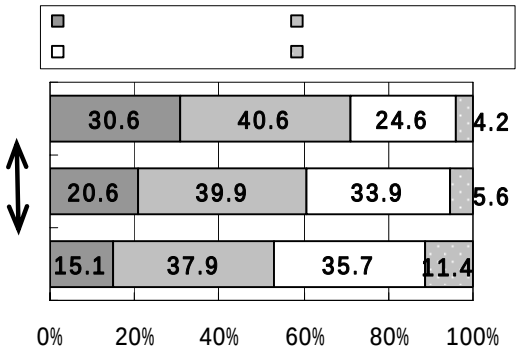
2

友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる（現在）



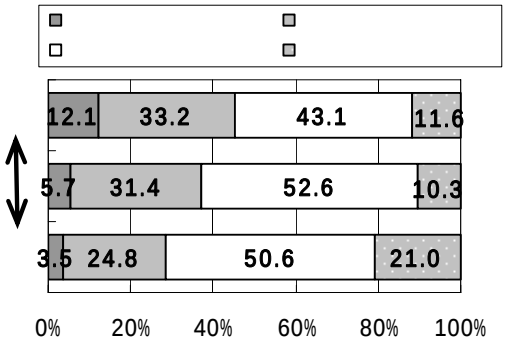
4-3- -8

経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい（現在）



4-3- -16

けんかをした友だちを仲直りさせることができる（現在）



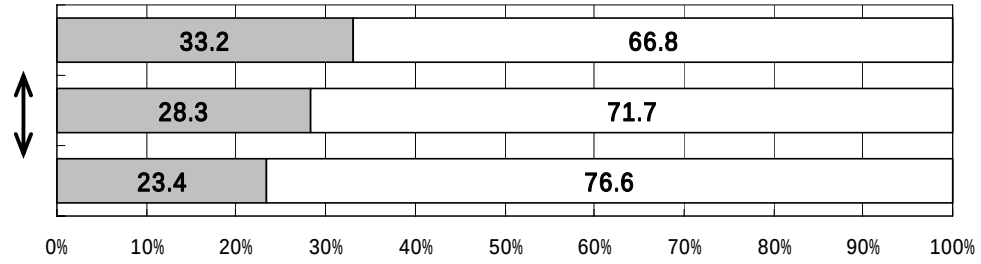
4-3- -33

1

5

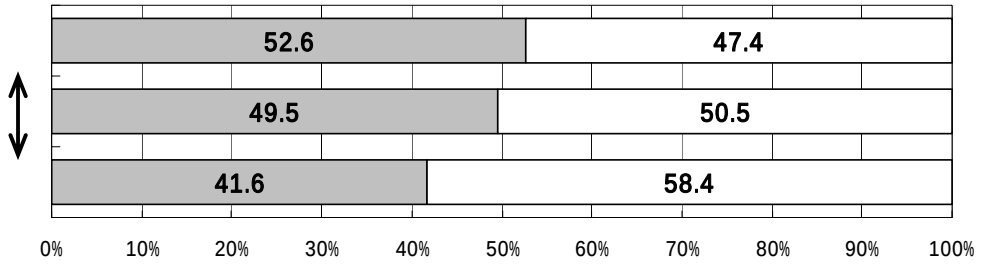
4-5- -1

6



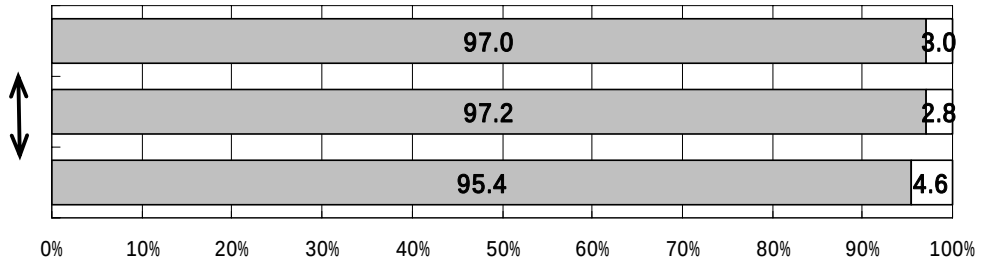
4-5- -2

2



4-5- -3

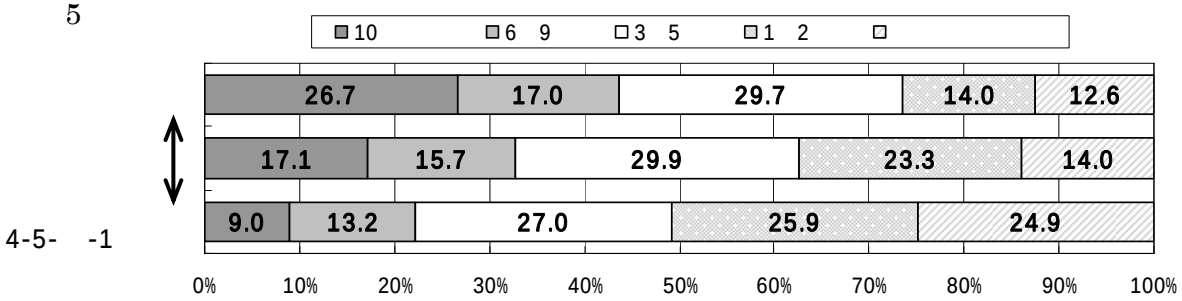
2



4-5- -4

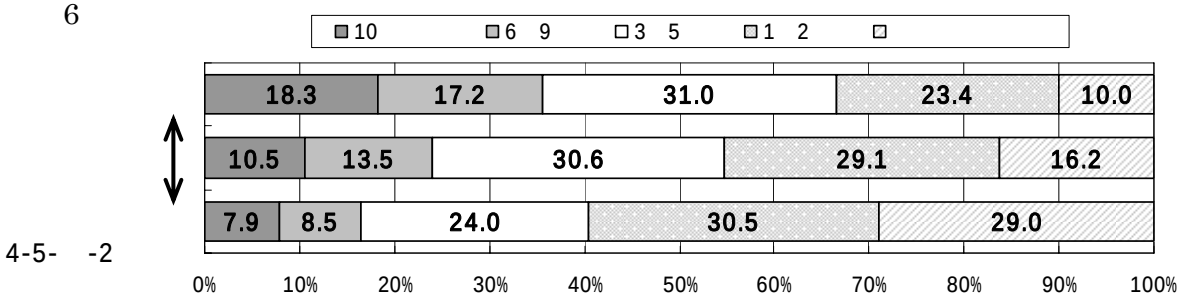
1

5



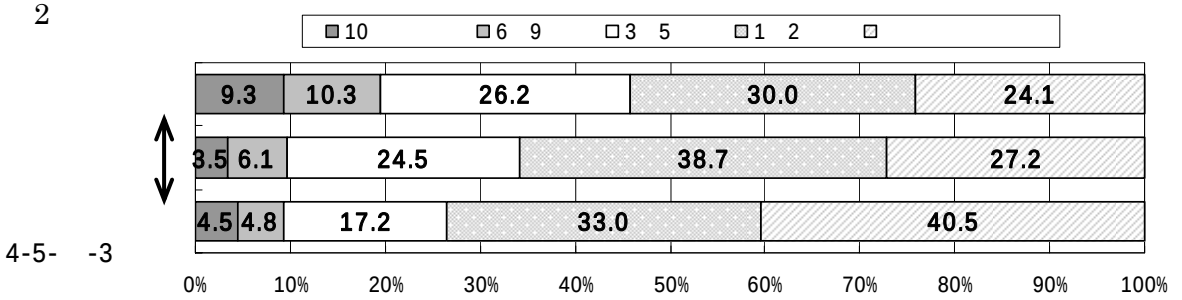
4-5- -1

6



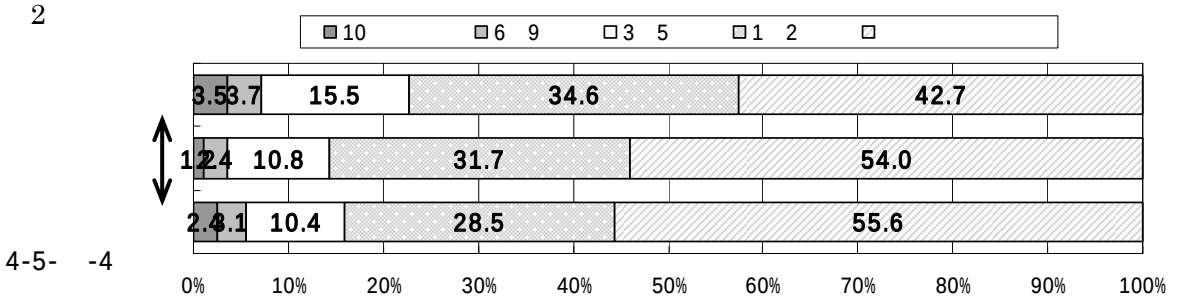
4-5- -2

2



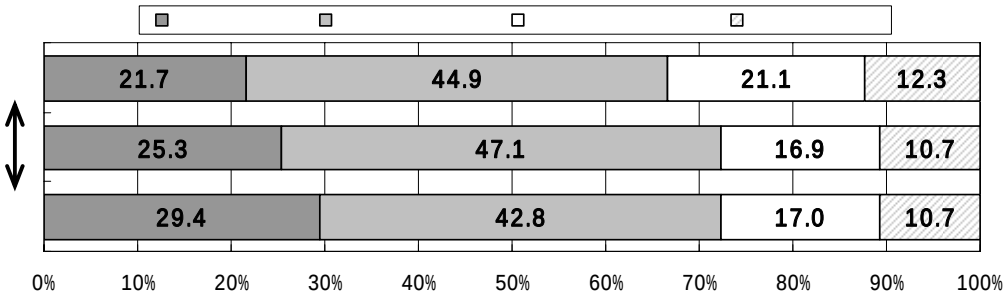
4-5- -3

2



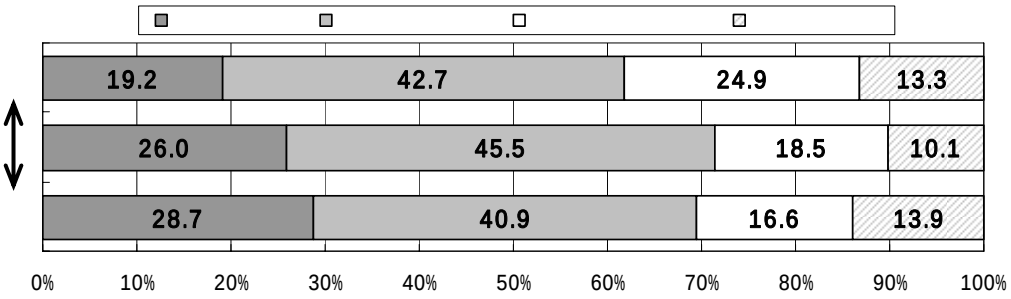
4-5- -4

5



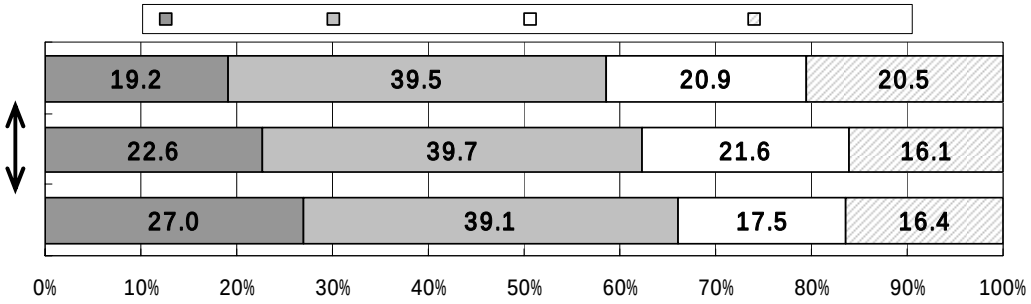
4-5- -1

6



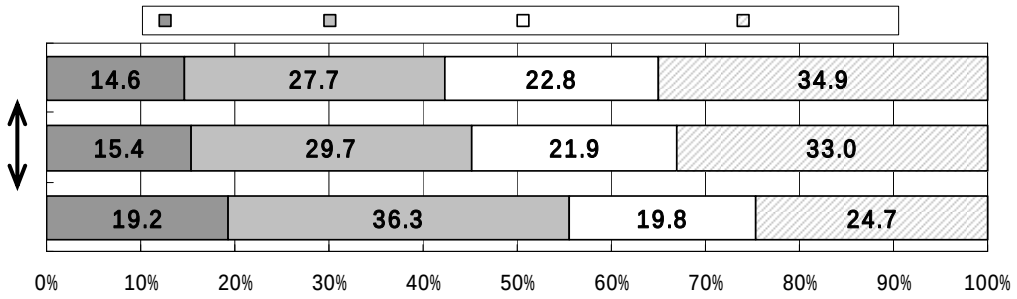
4-5- -2

2



4-5- -3

2



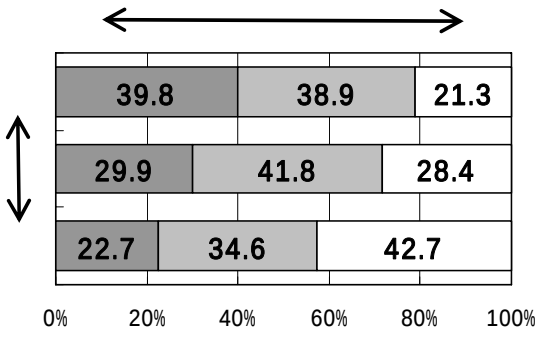
4-5- -4

2

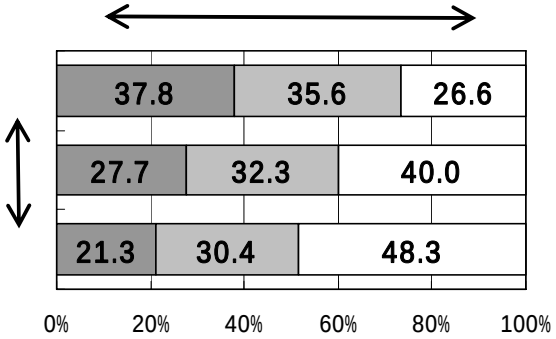
2

(p.5)

4-3-



4-3- -1



4-3- -13

千葉大学教育学部教授（研究会座長）　明石　要一

本研究会は「子どもの体験活動の実態」を明らかにすることを目的にしている。具体的には子どもの頃の体験が子どもの成長にとってどんな体験が大切か，を明らかにする。それはなぜか。理由は二つある。

一つは，「体験格差」が子どもの学力格差を生む社会状況になってきているからである。経済格差が直接に学力格差を生むのではなく，経済格差が体験格差を生み，それが学力格差をもたらすつながりができあがっている。しかし，今子どもの体験活動はどうなっているかの基礎調査が乏しい。子どもはいうまでもなく，大人世代の子どもの頃の体験活動はどうであったか，のデータも不足している。

二つ目は，体験は子どもの成長に欠かせない，体験をするとひとかどの人間になる，という言説がある。しかし，子どもの成長にどんな体験がよいのか，その体験は何時の段階にすればよいか，そして，体験を通してどんな力が身につくのか，さらに，子ども時代に豊かな体験をした者は大人になったときどんなインパクトを与えるのか，という課題に答える基礎調査がない。

Q)　　A)

成人調査から答える。

◇子どもの頃，「自然体験」，「動植物とのかかわり」，「友達との遊び」，「地域活動」，「家族行事」，「家事手伝い」といった体験が多いほど，大人になってからの「自尊感情」，「共生感」，「意欲・関心」，「規範意識」，「人間関係能力」，「職業意識」，「文化的作法・教養」といった「体験の力」が高い。

６領域の体験を分けているが，それらの多くの項目は７領域に分けた「体験の力」と関係していることがわかった。これまでの研究では，体験活動と「規範意識」は関係がある，という知見はあったがこれほどの総合的なアプローチでの結果は初めてである。

子どもの頃の体験と大人になってからの体験の力の結びつきを調べた結果，次のことがわかった。

・小学校低学年までは「友達との遊び」と「動植物とのかかわり」が体験の力に関係している。
・小学校高学年から中学生までは「地域活動」,「家族行事」,「家事手伝い」等が体験の力に関係している。

「体験」はいつでも効果的とは限らない。子どもの成長に合わせた「体験活動」があるようだ。今後はこの知見を踏まえた体験活動の提供が求められる。「卒啄（そったく）の時」という諺がある。雛が内から殻を破ろうとする鳴き声に答えて親が外から殻をつついてあげる，という意味である。ベストチャンスがあるのである。

子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い，という結果がある。

◇子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い。その体験は，次のとおりである。
・「海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりした」
・「海や川で泳いだ」
・「米や野菜などを栽培した」
・「チョウやトンボ，バッタなどの昆虫をつかまえた」という積極的な自然体験をした者である。

また,「弱い者いじめやケンカを注意した」り,「かくれんぼや缶けりをした」,それから「地域清掃に参加した」,「家族で家の大掃除をした」,「家族の誕生日を祝った」等をしている。

◇青少年施設や社会教育施設を利用した者ほど，最終学歴が高い。

◇お稽古・習い事をした者ほど，最終学歴が高い。

◇子どもの頃の体験が多いほど年収が多い。その体験は，次のとおりである。

ここでも積極的な体験が大きなウエイトを占める。それ以外では，おしくらまんじゅうのような遊び体験や，地域の人に叱られた，地域掃除に参加したという地域とのかかわり等があがる。

◇最終学歴，年収という社会的な地位の形成と関係している体験はほぼ同じ結果を得る。

◇体験が多いほどそうでない者に比べて，結婚している割合が多く，子どもを二人以上持っている。

◇体験が多い者ほど一ヶ月に読む本の冊数が多い。

青少年調査でも，成人調査とほぼ同じ結果を指摘できる。

◇幼少期から中学生期までの体験の多寡は，高校生の「体験の力」に関係している。
◇体験が多い子どもほど，本を読んでおり，コンピューターゲームやテレビゲーム遊びが少ない。

◇「自然体験」，「動植物とのかかわり」，「友だちとの遊び」は高校生と比べると中学生の方が少ない。
　中学生の方がこうした体験が少なくなる。しかし，「家族行事」では高校生より，中学生の方が多く体験している。他のデータからも同じ結果が伺える。不況の影響で家庭での団らんを含めて家族行事が増えているようだ。家庭回帰の兆しが見え始めているのかもしれない。

子どもの頃の体験 30 項目及び，「体験の力」35 項目を因子分析した結果，次のことがわかった。

◇成人と青少年では，項目を構成する因子※（以後「かたまり」と表現する）が異なる。

・子どもの頃の体験 30 項目について
　成人調査では「自然体験」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり，次が「家事手伝い」に関する項目，三番目が「地域活動」に関する項目である。
　また，成人調査ではこちらがあらかじめ想定した項目同士が同じ「かたまり」を示した。例えば，「自然体験」の項目で，「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見た」，「太陽が昇るところや沈むところを見た」，「海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりした」，「湧き水や川の水を飲んだ」，「海や川で泳いだ」は同じ「かたまり」をつくっている。
　青少年調査では成人調査とは異なり，「家事手伝い」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり，次が「自然体験」と「動植物とのかかわり」に関する項目（ミックスされている），三番目が「地域活動」に関する項目である。

・「体験の力」35 項目について
　成人調査では「規範意識」に関する項目が第一に「かたまり」をつくる。それら項目は社会通念上，常識と呼ばれる事柄である。次が「人間関係能力」に関する項目，三番目が「意欲・関心」に関する項目である。
　また，青少年調査では第一因子は「規範意識」を中心とした常識に関する項目が同じ「かたまり」を示した。次が「共生感」である。三番目に「人間関係能力」が来る。

「自尊感情」では成人と青少年は若干意味が異なる。成人は「自分，家族，学校，地域，日本」が一つの「かたまり」をつくるが，青少年では「自分と家族」の「かたまり」と「学校，地域，日本」の「かたまり」で分かれている。

※ 因子とは，「因子分析」という統計技法を用いることで，得られる。因子分析は，多数の項目間の関係等によって「かたまり」をつくり出す。それによって，心理尺度等の全体的特徴を理解しようとするもの。

1）体験の持つ意味の量的な側面はかなり発見できた。次は「質的な側面」の解明である。具体的には，特定の人物を対象に量的調査で得られた知見を検証することである。

2）成人調査と青少年調査では，ほぼ同じ傾向が認められた。しかし，「体験」の持つ意味が異なる側面も見いだされた。これからは，具体的な体験がどのような「かたまり」を形作り，それらから身につくであろう「体験の力」の「かたまり」はどうなっているか，年齢ステージごとに明らかにしていく必要がある。

3）日本の「体験」と諸外国の「体験」は同じ意味を持つのか，の比較検討が必要だ。「体験の力」では規範意識を中心とした常識が中核をなしているが，これは国によって異なる。特殊的なものと普遍的なものをはっきりさせなければならない。

国立青少年教育振興機構　理事長
田中　壮一郎

青少年が心身ともに健やかに成長していく上で，様々な体験をすることが重要であることは国民にも広く浸透しているが，近年その影響に関する実証的な調査はあまりされていないように感じていた。そこで，千葉大学の明石教授に，子どもの頃の体験と，一人前の人間として身につけるべき生きる力のうち，知識を除いたもの（「体験の力」）について調査研究をお願いしたところ御快諾いただき，今回の調査がスタートした。明石先生の御尽力により，優れた研究者による調査研究協力者会議が設けられ，「子どもの頃の体験が豊かな人は，充実した人生を送っているのではないか」との仮説のもと，調査とその分析がなされ，今回のような結論を得ることができた。明石先生をはじめ，調査研究協力者会議のメンバーの先生方に心より感謝申し上げる。

なお，私としても，今回の調査において，若干の分析を試みたので，ここで報告させていただく。

1. 今回の調査において「体験」については，①自然体験，②動植物とのかかわり，③友だちとの遊び，④地域活動，⑤家族行事，及び⑥家事・手伝いの６つのカテゴリーに区分し，それぞれのカテゴリーに５項目の質問を設定した。

   また，「体験の力」としては，①自尊感情，②共生感，③意欲・関心，④規範意識，⑤人間関係能力，⑥職業意識，及び⑦文化的作法・教養の７つのカテゴリーに区分し，同じくカテゴリー別に５項目の質問を設定した。したがって，調査の結果としてそれぞれの項目間 30×35＝1050 組の相関関係を把握することができたが，このうち相関関係の強いものを 30 組取り上げてみたところ，本報告書別冊資料 p21-25 のとおりとなっている。

2. この 30 組を「体験」の面からみると，地域活動に関する項目及び家事・手伝いに関する項目がそれぞれ 30 組のうち７項目，ついで友だちとの遊びが６項目，自然体験及び動植物とのかかわりがそれぞれ４項目，家族行事が２項目となっており，特に「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」（地域活動）及び「弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと」（友だちとの遊び）が５項目となっている。また

	7
	7
	6
	4
	4
	2

（家事・手伝い）では，「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」が３項目であり，「家族で家の大掃除をしたこと」（家族行事）も加えると「お手伝い」関係は８項目となる。

また，「体験の力」の面からみると，カテゴリー間で大きな差が出ており，人間関係能力が１２項目，文化的作法・教養が１１項目，共生感が６項目あるのに対して，意欲・関心は１項目，自尊感情，規範意識及び職業意識は１項目も３０傑に登場していない。具体的にみると，「日本の昔話を話すことができる」（文化的作法・教養）が８項目と一番多く，「友だちに相談されることがよくある」（人間関係能力）が６項目，「休みの日は自然の中で過ごすことが好きである」（共生感）５項目となっている。

	12
	11
	6
	1

3. 次に項目間の関係をみると，「弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと」が何度もあった人が「ケンカをした友だちを仲直りさせることができる」や「友だちに相談されることがよくある」の割合が高くなっていることは当然だと感じられるが，一見直接関係がなさそうに見える「日本の昔話を話すことができる」こととも相関関係が見られる。

		.368**
		.259**
		.269**
		.246**
		.294**
		.272**
		.266**
		.260**
		.255**
		.253**
		.252**
		.246**
		.241**

「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」「食器をそろえたり片付けたりしたこと」「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「花を育てたこと」「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」「洗濯をしたり干したりしたこと」も「日本の昔話を話すことができる」ことと深く関連している。

近年子どもたちの体験に関して「目的」を明確にし，「指導方法」を確立することが大切だと言われ，また，いじめや不登校の防止等を目的とした特別なカリキュラムの開発が行われている。私も，このことは大変大切な視点であり，重要な試みであると考えるが，特定の体験活動を１時間や２時間，あるいは，１日や２日実施することで子どもやクラスが変化することを期待することはむずかしいのではないかとも感じている。また，例えば，「いじめ」を解消するためには，私も，子ども達にいじめが卑劣な行為であることを理解させるとともに，いじめを早期発見し，適切な対応を行うことが大切であると考える。しかし，それだけで本当にいじめが解消できるだろうか。子ども達の持っているフラストレーションやストレス，学校に対する閉塞感を解消することが不可欠ではないだろうか。そのためにも子ども達が仲間同士で，あるいは異年齢集団で日常的に打ち込むことができ，それによって充足感や達成感の感じられる様々な体験活動をさせることが大切ではないかと考えてきた。

今回の結果を見ると，例えば上記のように，子どもの頃の様々な体験が日本の昔話ができるということと相関関係が示されており，体験の内容やその実施方法も大切なことかもしれないが，そのことよりも，体験の力，ひいては生きる力を育てていくためには幼少年期を通じて，日常生活の中で，様々な自然体験，生活体験，社会体験を積み重ねていくことがより重要であることの証明ではないだろうか。したがって，今後このような点を十分認識した上で，子どもたちが日々様々な活動を体験できるよう，それぞれの地域で，活動の機会や場の整備・充実を図っていくことが私たちに課せられている大きな課題であると感じている。

4.　鳩山前総理は平成２１年１０月の所信表明演説の中で「新しい公共」の必要性を強調され，私も携わった新しい教育基本法においてはこの新しい公共を支える「公共の精神」の大切さが明記されている。

今回の調査においては新しい公共を支える意識，例えば，「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」（規範意識），「できれば社会や人のためになる仕事をしたいと思う」（職業意識）との関係についても分析している。

「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」ことについては「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」との相関関係が一番高くなっているが，「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「かくれんぼや缶けりをしたこと」「食器をそろえたり片付けたりしたこと」「家族で家の大掃除をしたこと」との相関関係もみられる。

また，「できれば社会や人のためになる仕事をしたいと思う」では，「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「家族で家の大掃除をしたこと」「近所の小さい子どもと遊んであげたこと」「かくれんぼや缶けりをしたこと」「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」「すもうやおしくらまんじゅうをしたこと」などが相関関係を示している。

		.226**
		.219**
		.203**
		.201**
		.198**
		.206**
		.196**
		.184**
		.181**
		.177**
		.177**

以上のように，今回の調査により，あまり関係があると思われないような様々な体験が多様な体験の力と相関関係があることが判明した。その中で特に「新しい公共」という観点から今回の調査をみてみると，家庭でのお手伝いが総じて高い関係を示している。当機構においても，平成１８年度から「早寝早起き朝ごはん」運動を推進するとともに，その中で「読書・手伝い・外遊び」を推奨している。

今回の調査結果をも踏まえ，新たに，青少年育成に携わる団体と連携し，青少年の健やかな成長にとって，体験がいかに重要であるかを広く家庭や社会に知っていただき，社会全体で子どもたちの様々な体験活動の促進・充実を図ることを目的として「体験の風をおこそう運動」をスタートさせたところである。今後，この運動が広く国民の皆様方に浸透することを願うものである。

1.

2.

(1) (p.22)

(2) (p.22)

(3)

(4) 1

3.

(1)

20 60 5,000

500

21 11 13 16

(2)

11,000

5 2,860 98% 6 2,830 98%

2 2,480 98% 2 2,844 99%

21 11 27 12 18

4.